
ジム & ジェーンの伝説

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ジム&ジェーンの伝説

【Nコード】

N6023B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

バイクの事故で死んでしまったジム。主人公である『俺』は彼の恋人のジェーンをジムの死んだ場所へと連れて行く。そこでの悲しい別れは。チェッカーズシリーズ第十七弾、プロローグの後のお話です。大ヒットしたシングルです。

第一章

ジム&ジェーンの伝説

「どうしても行くんだね」

俺はもう一度ジェーンに尋ねた。

「……………ええ」

ジェーンはこくりとそれに頷いた。それで全ては決まった。

「……………わかったよ」

俺もそれに頷いた。そしてジェーンに声をかける。

「じゃあ案内するよ。後ろに乗りな」

「……………御免なさい」

「謝ることはないって。そこへ連れて行くだけなんだからさ」

「そうね」

「そうさ。だから気にするなって」

「……………うん」

いつものジェーンじゃなかった。その青い目がとても悲しげだった。

俺は自分のバイクの後ろにジェーンを乗せた。そしてハイウェイに出る。

ジェーンは俺の背中を抱いて後ろにいる。俺はそのまま道を走って行った。

(馬鹿野郎が)

俺は心の中で呟いた。ジムに対してだ。

ジェーンはそもそも俺が好きだった。この掃き溜めみたいな生活の中で彼女はやっと見つけた花みたいなもんだった。けれどジェーンが好きだったのは俺じゃない。ジムだった。これはよくある話だ。そこからもよくある話だった。俺達はバーガーショップの前で話をした。

そこで言ってやった。彼女は御前が好きだと。それで俺の恋は終

わった。ジムとジェーンは恋人同士になり一件落着だ。一人だけ少し指を啜えれば済む話だった。

その筈だった。けれどそうはいかなかった。

「……………何でだよ」

ジムが事故って死んだって話をバーガーショップの駐車場で聞いた時俺はまずこう言った。

「何であいつが死ななくちゃいけないんだよ」

「そんなこと俺に言われてもよ」

それを俺に伝えてくれたダチは俺の剣幕に困った顔をした。

「俺だつてまさかあいつがこんなことになっちまうなんてよ」

「……………そうだったな」

それを言われてやっと落ち着きを取り戻した。

「すまねえ。カッとなっちまった」

「いや、いいさ」

ダチもそれに優しく返してくれた。俺の気持ちを察してくれたからだった。

「けど、大変なことになったな」

「ああ」

俺はそれに応えた。

「とりあえず遺体は病院行きだ」

「そうか」

「即死だつたらしい。頭をやたら強く打つてな。メットが粉々だったらしいぜ」

バイク乗りの事故なんてそんなものだ。一步間違えればそれでお陀仏だ。酷い場合なんか死体がグチャグチャになっちまってる。ジムの奴がどんな有り様だったかある程度は予想がつく。嫌な話だ。

「家族とかは」

「一応連絡つけとくか？確かシアトルかどっかだったよな」

「あれ、あいつあっちの生まれか」

「自分で言ってたぜ。詳しいことはハイスクールの方に聞けばわか

るだろ」

「じゃあそつちには俺から連絡つけとくな」

「ああ、頼む」

「それでジェーンだけどな」

話が本題に入った。

「あいつにも知らせないと駄目だろうな」

「そうだな」

それだ。俺が一番気にしていたことだった。

恋人が死んじまつたってことは絶対に伝えないといけねえ。だがそれを誰が、どうやって伝えるかだ。それが問題だった。けれどそれができるのは俺には一人しかいないように思えた。

「俺が行くよ」

そう、俺しかいなかった。

「御前がか」

「ああ、だから任せておいてくれよ」

にっと口の端を歪めさせた。作り笑いだ。

「それでいいよな」

「ああ、じゃあ頼むぜ」

俺の話聞いてくれた。これで決まりだった。

「じゃあ今からジェーンのところへ行って来るな」

「それじゃあな」

「他のことは頼んだぜ」

「わかった」

こうしてバイクに乗ってジェーンのところへ向かう。そしてジムのことを伝えたのだ。

「嘘……」

アパートの玄関でそれを伝えた時ジェーンの顔が割れそうになったのは今でもはっきりと覚えている。忘れられるものじゃない。

「昨日まであんなに元気だったのに」

「バイクさ」

俺は言った。

「ハイウェイでな。事故つちまってる」

「そう、それで」

「ああ、即死だったらいい」

俺はそれも伝えた。

「そういうことだよ。じゃあ」

「待って」

ジェーンは立ち去ろうとする俺を呼び止めた。

「ジムは……死んだのよね」

「ああ」

俺はまた答えた。

「何度でも言うぜ。あいつはもう」

「……わかったわ」

それを聞いたうえで小さく頷いた。それから彼女は言った。

「私もそこに行きたいわ」

「そこへ行って？」

「ジムが死んだ場所に。それでお別れを告げたいのよ」

「ジェーン……」

俺はジェーンを見た。その顔には今にも泣きそうで、それでも強い決心があった。そんな彼を見せられちゃ俺もどうしようもなかった。頷くしかなかった。

「じゃあ行くか」

「お願いできる？」

ジェーンは俺に問い掛けた。俺はもう一度聞いた。

「どうしても行くんだね」

と。ジェーンはまた頷いた。それで俺達は今ここにいます。

第二章

「ここなのね」

「ああ」

ジェーンは欠けたアスファルトにやっと血を拭ったばかりのコンクリートを見ていた。まだ事故の後が残っているみたいだった。それが生々しかった。

「ここさ。あいつがいつちまったのは」

「そう……」

俺達はヘルメットを脱いでいた。そしてじつがいった場所を見ていた。二人で。

けれどジェーンは一人になっちまっていた。俺はいないも一緒だった。けれどそれでよかった。ジェーンはジムのものだ。それが変わることはない。あいつがいつちまっても。ジェーンはあいつのものだからだ。それだけは変わりが無い。俺の想いなんてどうでもいいことだった。

ガードレールも壊れて歪に歪んでいた。そこにあつた血も拭き取られていた。けれど。もうあいつはいない。ここで旅立った証拠が壊れたアスファルトとこのガードレールだ。随分派手にやっちゃまったらしい。ジェーンには言っていないが五体満足でももう全身の骨が粉々だったららしい。即死だったのがせめてもの救いあっていう位のとんでもない有り様だったらしい。

「ジム……」

ジェーンは懐から何かを出した。それは一輪の白い薔薇だった。貴方が好きだった花。最期にこれをあげるわね」

そう言っつてコンクリートの前に捧げた。あいつが身体をぶつけた場所だ。

「そして」

ジェーンの目が動かない。唇も。だが言葉は出た。

「……………さようなら」

そう言った途端にその動かない目から涙が零れ出てきた。銀色の涙が。泣かない約束も。そんなものももうどうでもよくなって。ジェーンは泣いてしまった。

「……………帰るか」

俺はそんなジェーンに声をかけた。ジェーンはそれに無言で頷いた。

またヘルメットを被ってバイクに乗った。ジェーンは後ろにいる俺の後ろで泣いているのがわかる。

俺達は走り出す。そこであのバーガーショップが目に入った。俺もジムもジェーンもいたあの店が。店の中には俺達が笑って映っている写真だつてある。

「寄つてくか？」

「いいえ」

ジェーンは俺の後ろで首を横に振った。壁に赤いスプレアの文字が映った。

『I LOVE YOU』

ジムが描いたやつだった。俺達に乗せられて静かな夕チだったあいつが珍しく乗って悪さをした時に描いたやつだ。ジェーンにあって文字だ。けれどその文字も今は主がない。

「いいわ、今は」

「わかったよ。じゃあ」

俺はジェーンに言った。

「飛ばすぜ、つかまりなよ」

「ええ」

「何も見えない位な。何処までも」

俺はアクセルを思いきり踏んだ。それでスピードをつける。

後ろでジェーンの髪が流れていた。ヘルメットの後ろから出た髪が。まるで流星みたいに。

俺はただただ飛ばした。何も見えなくなるまで、何も考えられな

くなるまで。何処までも飛ばした。

その後ろにいるジェーンはジムの背中を思い出していたかどうかはわからない。けれど今俺は飛ばさずにはいられなかった。何処までもだ。

俺達の向こうに赤いライトの群れが見えてきた。それは仲間達だった。

「御前等」

「水臭いぜ」

仲間達は俺達に声をかけてきた。そして言った。

「ジムとジェーンの為にな」

「今日はとことんまで走ろうぜ」

「ああ、何処までもな」

俺はそれに応えたうえでジェーンに声をかけた。

「それでいいよな」

「・・・ええ」

ジェーンはこくりと頷いた。それを受け入れてくれたのだ。

「お願い」

「わかったよ」

「じゃあ皆でな」

「行くぜジェーン」

「そしてジムもな」

「今日は何処までも」

「飛ばすぜ」

俺達は言い合ってさらに飛ばした。バイクはもう風になっちまっていた。

あいつが風になったのと同じで。俺達はそのまま風になって走り続けた。その風に別れを告げて。そこにいるジムに別れを告げて。俺達は何処までも走った。

ジム&ジェーンの伝説

ジム&ジェーンの伝説

完

2006・9・10

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023b/>

ジム & ジェーンの伝説

2009年6月29日19時12分発行